

- 基準協会の動き
- 論説 1 第三者評価を受けて得たもの
- 論説 2 ALO を経験して
- 協会から 自己点検・評価の質の向上を目指して
—協会開発の「短大生調査」

基準協会の動き

平成 27 年度

第三者評価

●平成 27 年度第三者評価委員会分科会が開催されました

平成 27 年度の第三者評価は、192 名の評価員が 47 の評価チームに分かれ、評価校の自己点検・評価報告書などによる書面調査（7 月～8 月）及び評価校に対する訪問調査（9 月～10 月）を行いました。各評価チームが担当評価校についてまとめた基準別評価票は、11 月 5 日（木）を締め切りとし、提出されました。

第三者評価委員会（原田博史委員長）では、分科会に先立ち 11 月 16 日（月）に今回の分科会のために委嘱した分科会委員（評価員経験者）を交えた第三者評価委員会全体会議を開催し、機関別評価原案の作成についての打ち合わせを行いました。



（第三者評価委員会分科会Ⅰのヒアリングの様子）

11 月 17 日（火）と 18 日（水）の第三者評価委員会分科会Ⅰでは、10 分科会に分かれてヒアリングに臨みました。各分科会では、5 校程度の評価校を担当し、平成 27 年度評価に当たったチーム責任者から当該評価校の概要についてのヒアリングと基準別評価についての質疑応答を行いました。ヒアリングした情報を踏まえて、機関別評価原案の作成に取りかかりました。

さらに、11 月 30 日（月）、12 月 1 日（火）には第三者評価委員会分科会Ⅱを開催し、問題点等の協議を行い、機関別評価原案を確定しました。



（第三者評価委員会分科会Ⅱの様子）

●機関別評価案を通知（内示）しました

第三者評価委員会では、12 月 10 日（木）に分科会委員も加わった第三者評価委員会・拡大会議を開催し、分科会で作成された機関別評価

原案を基に機関別評価案（内示案）を作成する作業を行いました。

12月17日（木）の理事会において機関別評価案（内示案）が報告され、審議の結果これを承認し、翌18日（金）に平成27年度評価校へ通知（内示）しました。評価校は、内示された機関別評価案の記載内容に事実誤認等がある場合は異議の申し立てを行うことができます。

調査研究

●短大生調査 2015 (*Tandaiseichosa* 2015) を実施しています

本協会の調査研究委員会（舘 昭委員長）では、短期大学における主体的改革・改善に資する自己評価方法に関する調査研究の一環として、短期大学における学習効果を測定する「短大生調査」の開発を進めてきています。

現在実施中の短大生調査（*Tandaiseichosa*）2015は、その8回目の試みになりますが、参加校に個別経費の実費負担を求めるようになっ

てから5回目、国際通用性を維持しつつも日本の短期大学に適合した内容に改良するとの方針の下での2回目の実施となっています。

平成27年10月上旬までの参加募集には、59校から21,070人分の参加申し込みがありました。その後、12月上旬までの各短期大学でのアンケート実施、年明けの2月中旬には参加校への集計結果の提供、4月には全体集計結果の取りまとめ、9月に参加校からのアンケートを受けての調査の評価を加えての最終報告のスケジュールで、研究開発を進めています。

今回は、分野別の集計・分析法が研究開発の重点の一つであり、個々の短期大学では学科・専攻ごとの分析が可能となっています。全体集計結果発表の中間報告時には、個別短期大学が特定されないほどに参加校の多い分野では分野別集計も試みます。

また、「研究開発」から本協会の「事業」への移行も、今後の検討課題としています。

コラム①

駅は駅に止まらない！

広報委員 森本晴生（新渡戸文化短期大学 学園長）

説明を耳で聞いて、分かったように思うものでも、書かれた説明を読むと分からないときがあります。聞いたときは記憶で確認しますが、読んだときは読み直すことができます。

車内放送でありそうな例をあげましょう。

「次の停車駅は上野に止まります。」

これを聞いて、次の停車駅は上野だと理解します。しかし、この文を読み返すと意味が通りません。この文は「『次の停車駅』が上野に止まる」と述べているのです。もちろん、上野駅は止まったままです。

この文は「次の停車駅は上野です。」と「この電車は、次は上野に止まります。」の二つの文が混ざっています。主語が途中で変わるので、意味が通らないのです。

学校でも似た言い方があります。

「レポートを提出し、三日以内に採点する。」

レポートを提出するのは学生で、採点するのは教員です。状況を承知している人はこの文で「採点期間が三日である」ことが伝わります。しかし、状況を知らない人は「学生がレポートを提出し、自己採点を三日以内にする」とも読めるのです。

当たり前のこと、分かりきったことは書かない、あるいは略して書く。これはどこの社会でもあります。したがって、他校の「自己点検・評価報告書」に、ある事項の記載が無い場合、その事項が行われていない場合と、当たり前のこととして実施されている場合があります。書く側に注意が必要です。読む側としては、別の資料を調べたり、関係者から説明を受けたりしないと、正しく理解できません。

論説 1

第三者評価を受けて得たもの

木内 秀 樹（東京成徳短期大学 理事長・学長）

はじめに

平成 27 年、本学園は、学園創立 90 周年と短期大学開学 50 周年を迎えました。学園創立以来、「成徳」（徳を成す人材の育成）を建学の精神とし、現在は幼稚園から大学院までを擁する総合学園として発展してきました。短期大学は、昭和 40 年に「学問研究」、「人間形成（知識を豊かにし教養を積む）」、「専門的技能教育（職業人の育成）」を教育目標に掲げて、初年度は文科のみでスタートし、翌年に幼児教育科を設置しました。その後、時代の要請により文科を言語文化コミュニケーション科に名称変更し、ビジネス心理科を設置する等の変遷を経て、平成 25 年度からは幼児教育科のみの短期大学として、次代を担う保育者を養成しています。

本学は、平成 19 年に短期大学基準協会の 1 回目の第三者評価を受け、平成 26 年に 2 回目の第三者評価を受けました。自己点検・評価報告書の対象となる平成 25 年度は、学長交代に加え、短期大学が単科としてスタートする初年度でもあり、また、校舎の新設・改築工事に取り掛かった年でもあったため、報告書作成に向けた準備に支障をきたす恐れがあるのではないかとこの危惧もありました。

しかし、本学は 1 回目の第三者評価を受けた翌年から、学内で毎年、短期大学評価基準に合わせて 1 年間の教育活動の見直し点検作業を実施してきました。そのため、大きな転換の

年ではありましたが、これまで積み重ねてきた評価・反省を生かして、毎年改善を続けてきた教育活動への取り組みをまとめ、報告書を作成することができました。

1 自己点検・評価報告書作成への取り組み

本学は、「東京成徳短期大学教育研究改善（自己点検・評価）委員会規程」にのっとり、「東京成徳短期大学教育研究改善（自己点検・評価）委員会」を設置しています。自己点検・評価委員会は、学長を委員長とし、科長・主任・学務部長・学生部長・ALO 教員、事務局長・総務課長・教務課長、図書館長という構成で、専任教員と事務局とが連携して教育活動の点検を進める中核となる組織です。この組織が中心になり、ALO が基準協会との仲介を果たして、短期大学評価基準に沿った提案を行いました。この提案に従って、全専任教員と事務局職員とで自己点検・評価報告書を分担執筆するとともに、エビデンスとなる資料を集約する作業を行いました。

作業を始めるにあたっては、1 回目の第三者評価を受けた際に指摘された「シラバスの書式を統一し、内容の改善を図る必要がある」、「教員人事、推薦入試の合否判定について学内規程を整備する必要がある」という二つの事項が確実に改善されていることを確認しました。そして、今回の第三者評価のポイントである【本学

の教育活動の特色、及び主体的精力的に取り組みを重ねている改善内容の明確化】をスローガンに、平成 25 年度の教育活動について各担当部署で評価し課題を見出して、そこで明らかになった問題点について、どの部署で誰が何をどのように改善しているかを明記するようにしました。

最初に着手した課題は、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーの三つのポリシーを建学の精神にのっとり再検討し、文言を精査するとともに、三つのポリシーの関連性・整合性についても科会で議論を重ねて本学の共通認識を図りました。また、学科の行事として受け継ぎ、毎年行うことが当然のようにとらえて実施してきた〈保育研修会〉や、本学独自の科目である「幼児教育基礎演習」、「児童文化」、「課題研究」等について、上記の三つのポリシーに照らして改めて意義を明確にしました。さらに、2 年間の学生生活における各行事のねらいや大学の理念と学生が学修した成果を照合し、本学独自の査定として「授業構成及び結果の評価票」を開発し検証してきました。このように、第三者評価を受けることで、本学の教育活動の取り組みの特色に各教職員が気付き、自覚を深める機会になりました。さらに、教員が、自分の専門科目・担当クラスの学生についてだけでなく、学科のすべての学生の学びに関心をもち、以前よりも自ら積極的に教育活動に携わる姿が見られるようになりました。第三者評価を受ける過程で経験したことが、現在に至るその後の教育活動においても十分に生かされていると実感しています。

毎年、自己点検・評価を継続して実施してきましたが、前年度の点検内容を元に変更点のみ書き換える作業をしてきたため、今回の自己点検・評価報告書作成にあたっては、様式の変更

点に気付かず、以前の形式で提出してしまい、提出後に差し替えるという失態もありました。また、全教職員による執筆体制をとったため、作業の進捗に従って、各部署でまとめた内容や表記の不整合や、エビデンス資料の不備、文書番号の不統一など、課題も次々に出てきました。また、財務関係については学園本部で資料を作成してもらいましたが、本部が同じキャンパスにないこともあり、互いの作業進捗状況が見えず、つき合わせが困難であった等のこともあり、最後は、ALO と科長・事務局長とがすべての報告書文書を通読し、不整合を整備しました。ここでも、事務局職員が丁寧に読み合わせ作業に参加してくれたため、教員が気付かなかった不備を発見するなどの連携がみられ、教職員が一丸となった取り組みで報告書を完成することができました。

2 訪問調査について

平成 26 年 9 月 30 日～10 月 1 日に訪問調査の評価員を迎え、本学の施設や学園生活の状況を視察していただき、面接調査を受けました。和やかな雰囲気の中で、本学の特色を丁寧に評価していただき、適切なアドバイスをいただくなど、当初は緊張して面接に臨んだ教職員もリラックスして応答することができました。温かく有意義なご示唆をいただいた評価員の方々はじめ関係各位に深く感謝しております。

おわりに

今回の第三者評価では、「自らの掲げる教育理念の実現及び教育目標の達成に向けて順調に進捗しており、短期大学の評価基準を満たしていると判断した」との総評をいただき、3 月に適格と認定されました。特に、1 年次必修科目

に学長講義を取り入れるなどして建学の精神を学生に周知していること、本学が独自に作成した〈授業構成及び結果の評価票〉を基に、学習成果を質的・量的データとして測定する取り組みを行っていること、リカレント教育の場として長年継続実施してきた〈保育研修会〉や、地域との連携活動にも近年力を入れて取り組んでいることなどを評価していただきました。これらの本学ならではの数々の取り組みを意義ある教育活動として評価していただいたことは、日頃学生指導に精励している教職員にとって大きな喜びとなりました。

第三者評価でいただいたアドバイスや、この

調査を通して教職員・学生に意識化できた本学の魅力を生かして、今後もよりよい学園創りを進めてまいりたいと思います。



(東京成徳短期大学のキャンパス)

論説 2

ALO を経験して

青 嶋 由美子 (豊橋創造大学短期大学部 教授 ALO)

はじめに

豊橋創造大学短期大学部（以下、本学）は、平成 19 年度に第 1 回目の第三者評価を受けております。その際、私は、自己点検・評価報告書の担当部分の執筆と面接調査には関わりましたが、全体像を理解していたかと問われると答えは否というものになっていたと思い返されます。

そのような私が、ALO を学長より拝命したのが、平成 25 年 4 月のことでした。前任者の退職に伴い、このような大役がまさか自分に命

じられるとは予想しておりませんでした。そして、平成 26 年度には第 2 回目の第三者評価を受けるという事実を確認し、責任の重さと不安に打ちのめされるようにして、ALO という役割に挑む日々が始まりました。

1 ALO 対象説明会への参加

8 月に行われた ALO 対象説明会への参加は、私の中の混乱を整理し、ALO が果たすべき役割を再認識させてくれる大変良い機会となりました。この説明会を通して、本学が既に実施し

ている内容と、さらに進化させ展開が必要となる事項を明確にすることが出来たように思われます。

学長をはじめとする執行部と前任の ALO のおかげで改革は順調に行われており、本学において、建学の精神が確立しているか、学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針、入学者受け入れの方針といった三つの方針を示しているか、学習成果について点検・評価する査定が明確であるか、PDCA サイクルを有しているか、といった今回の評価の根幹部分については、既に機能していることは分かりました。

しかし、それらが本学の教職員全体にとっての共通認識となっているのか、組織的な資質・能力向上のための取り組みとなっているのか、さらにエビデンスとして目に見える形で提示することが出来るのかという点が、これからの課題となることもこの時点ではっきりしました。

2 自己点検・評価報告書の作成

報告書の作成については、今まで通りの執筆者に依頼しました。今回は、例年よりも早く報告書を仕上げる関係から、5 か月程締切日が早まりました。年度替わりの大変に慌ただしい時期にもかかわらず、教員・事務職員の協力により、順調に原稿は集まりました。そして、原型が出来上がったところで、本学の自己点検・評価委員会（豊橋創造大学と合同）の短期大学部専門部会の教員全員で、校正作業に入ったのです。報告書の原稿は、それぞれの担当部署で作成しているため、統一感に欠ける部分があったり、点検・評価について現状の把握に甘さがあったりしており、その部分を中心に校正していきました。この校正のためのミーティングは回数も多く、長時間にわたり、その結果、自己点検・評価の意義を参加者全員が共有出来るよ

うになったと思います。校正作業は提出期限ぎりぎりまで行いましたが、学長の承諾を得られた時には安堵の気持ちでいっぱいになったことが思い出されます。

3 評価チームの訪問調査

訪問調査当日まで、担当部署を中心にして準備を進めましたが、この時に本学の事務局スタッフが一丸となってバックアップしてくれ、大変心強く感じたことは忘れられません。評価員の先生方への前日のご挨拶には、副学長と共に伺いました。そして、事前打ち合わせ、その後の3回の面接調査、学内視察という日程で訪問調査は行われました。報告書で十分に記述出来ていなかった点や備付資料として入れておけば良かったと反省した点などもありましたが、評価員のピア・レビューの精神に裏付けられたご対応から、この訪問調査は本学の教職員全員にとっての大変良い経験となりました。漫然と自己点検・評価を繰り返すだけでなく、第三者にも納得していただける形、言い換えれば誰の目から見ても明確な形で自己点検・評価を行い、今後につなげていくのだと実感する機会となったのです。この調査の際にご指摘いただいたSD 規程については、準備が整い、平成 28 年 1 月 1 日より施行されることとなりました。

おわりに

今回、第 2 回目の第三者評価を終えて、学生を迎え入れて教育していくことの意義と難しさを改めて感じました。学生は毎年変わっていくのに、教育の内容や受け入れ体制が変わっていかないというのは、教育の質は保証されません。教職員が一体となり、教育の質を保証し、さらに向上させていくために、短期大学での自己点検・評価は不可欠なものと言えるでしょう。

そして点検・評価した結果は、次の段階に確実に反映されなければなりません。そのステップアップのために、第三者の助けを借りるというのが、第三者評価の一つの意味であるようにも思われます。

最後になりましたが、本学の教育の在り方を振り返る機会を与えてくださいました評価員の先生方、短期大学基準協会に関係する皆様に、改めて感謝を申し上げます。どうも有難うございました。

協会から



自己点検・評価の質の向上を目指して 一協会開発の「短大生調査」

一般財団法人短期大学基準協会 理事

調査研究委員会 委員長

桜美林大学 大学アドミニストレーション研究科 教授

館 昭

本協会の調査研究委員会が、自己点検・評価の質の向上に資するものとして研究開発を進めているのが、「短大生調査 (Tandaiseichosa)」です。本委員会では長年にわたり、「短期大学における主体的改革・改善に資する自己評価方法に関する調査研究」を、調査研究の重点課題としています。その取り組みの一つとして平成20年度に開始したのが短期大学における学習効果測定法の開発で、具体的には、各短期大学が自学生の成長の姿を把握することのできる標準化されたアンケート形式による調査の開発を目指しています。

本調査は、平成25年度までの6回は、山田礼子教授（同志社大学）をリーダーとする「大学生調査研究プログラム (JCIRP)」の研究開発と協力し、「短大生調査 (JJCSS)」として実施してきました。そして、第7回とな

る平成26年度からは、山田教授を担当委員とし、研究協力者・開発チームによる研究開発で大幅に改良し、協会独自の「短大生調査 (Tandaiseichosa)」として行っています。

独自開発2年目であり8回目となる本年度の「短大生調査2015 (Tandaiseichosa 2015)」は、平成27年9月に参加校を募集し、10月上旬に申し込みを締め切り、12月上旬までに各短期大学で調査が実施されました。2月中旬には参加校へ集計結果を送付し、その後、4月には全体集計結果を取りまとめ、参加校のアンケート調査を実施する予定です。また、9月にアンケート調査の結果を加えての最終報告書を作成するスケジュールとなっております。本年度は59校から21,070人分の参加申し込みの下に実施しています。

本研究の第一の目的は、調査研究の課題とし

ている「短期大学における主体的改革・改善に資する自己評価方法」の開発であります。科学的な研究の蓄積に基づく質問項目により、精度の高い自己評価資料が得られることから、参加短期大学にとって、自己点検・評価の資料として第三者評価への対応に役立つだけでなく、自校の強みや弱みを把握してのマーケティングへの利用などのメリットがあるでしょう。また、全体のデータは、学術研究に活用され、学位教育としての内実やコミュニティカレッジ的特質などの、短期大学の研究と情報発信への貢献が期待されます。

現在、実施中の平成 27 年度調査の概要、過去の調査の全体集計結果の最終報告書や調査票見本などが、本協会のウェブサイト上の「短大生調査 (Tandaiseichosa)」にあります。また、本調査を用いた学術研究の成果についても、同サイトでご覧いただけます。

当初は、本協会の調査研究委員会の予算の範囲で実施していたことから、希望する全ての短期大学にご参加いただくことが出来ませんでした。そこで、平成 23 年度の調査より、参加校に個別経費部分の実費負担をいただいて、希望校全校の参加が可能となっています。さらに、今後は研究開発としての扱いから本協会の事業とすることも視野に入れています。そうなれば、

この種の調査としては、公的組織による初めての自主開発の調査の実施として、本協会の自主性と短期大学の底力の一端を示すものになると信じています。

コラム②

お辞儀と握手

広報委員 森本晴生
(新渡戸文化短期大学 学園長)

挨拶の仕方にお辞儀と握手があります。お辞儀は日本の伝統的な挨拶の動作であり、握手は外国で行われてきたお互いの好意を示すための動作で、日本でも明治期に導入されました。お辞儀はまだ世界に広まっていませんが、握手は世界的な動作になっています。

日本では、お辞儀の習慣を残しながら握手をする人が多く、これは外国の習慣とは違った動作になります。握手は、利き手である右手を相手に預けるので、敵意がないことを示すもので、相手の目を見ながら握手するのが原則です。挨拶のときにお辞儀をする習慣があり、目を見て話すのは相手に失礼だと思っている人にとって、目を見ながらの握手は、やりにくいものです。

握手するときにお辞儀もする習慣を世界に広められるのか、相手の目を見ながら話し、握手もするという習慣が日本に広まるのか、あるいは両方が混在したまま今後も続いていくのか、興味を持ってながめています。

編集後記

この冬は暖冬だと言われていますが、東京 23 区でも霜柱が立つ日が続いています。暖冬ではないという人もいますが、冬を通しての平均気温は、この冬は低くないそうで、一般の人が言う「暖冬」の意味と、気象庁が使う「暖冬」の定義が違うそうです。

第三者評価は、3 月末には今年度の結果が広報されます。これと同時に、第 3 評価期間への対応を検討しています。一方で、短大生調査は今回が 8 回目の試みで、今後、事業への移行することを検討課題としています。(P HM)

編集・発行

一般財団法人 短期大学基準協会 広報委員会
〒102-0073 東京都千代田区九段北 4-2-11
第 2 星光ビル 6 階
Tel. 03-3261-3594 Fax. 03-3261-8954
E-mail : jimukyoku@jaca.or.jp
URL : //www.jaca.or.jp/